

J・N・ハリスのメッセージ

講演	森 一郎〔もり・いちろう〕
講師紹介	元同志社女子中学校・高等学校校長 元同志社女子中学校・高等学校理科教諭

紹介いただきました森です。元女子中高で化学の教員をしておりました。現在の理工学部の前身の工学部、工業化学科の修士課程の出身です。学生の頃には今日お話しさせていただく、ハリス理化学館で研究実験をしたなつかしい経験もあります。

新島は自然科学が好き

新島襄は同志社の創立者で教育者であり、また会衆派の牧師であってキリスト教の伝道師として知られています。しかし一方では、「理科大好き人間」でした。安中藩の祐筆の長男として江戸で生まれた江戸っ子です。13歳の時には藩から選ばれ蘭学を学ぶ機会を与えられ、17歳の頃には軍艦教授所に通い航海術や数学を学んでいます。この頃のことを新島は「脱国の理由書」（現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善 2000年 50～56頁）や『マイ・ヤンガーディズ』で示していますが、江戸湾に停泊するオランダの軍艦を見てその威容に驚き、それを支えている知識や技術に強い関心をもっています。そのことが海外へのおこがれ、さらには脱国にもつながったのでしょう。知識や技術を自分が身につけたいとの思いがありました。日本を脱出してからおよそ10年に及ぶアメリカでの生活を、さらに岩倉使節団の田中不二麿の通訳で米欧の教育施設・教育制度の視察を通して、キリスト教主義に基づく教育で人物を育てることが重要であるとの思いに達し、帰国後「官許同志社英学校」の開校につながったわけです。その後、同志社の教育内容を高めるために同志社大学設立運動に取り組みます。その中にはすでに科学教育に対する考えが含まれています。同志社英学校の卒業生でウースター・ポリテクニク・インスティテュートに留学中の下村孝太郎（熊本バンドの一人）に送った書簡に在ります。

「小生ハ我カ校ニ於テサイヨンスノ振ハサルヲ痛嘆シ候間、貴兄ニシテ充分御用意アリ其ノ方ヲ負担シ賜ハ、必ラス我カ校ノ面目ヲ一変スルニ至ラン、願クハ今ノ本校ヲシテ充分コレシノ位置ニ進メ度、政府ノ高等中学ニモ一歩ヲ譲サル様ニ致シ度候」下村孝太郎への書簡〔1888（明治21）年8月11日 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』3 同朋舎出版 1987年 621頁。以下③621〕

また、「大学設立主旨」には

「吾人ハ此の科（神学）を以て足れりとせず、此より進みて文学、法学、理学、医学等の諸学科を置き」（①151（ ）内は講演者注）

と現在の理系学部に対応するものが必要であることを発表しております。その思いが今日お話しさせていただくJ・N・ハリスに伝わり、10万ドルにも及ぶ多額の寄附の申し出があって「同志社ハリス理化学校」開校につながるわけです。現在の同志社大学理工学部の源流にあたると言っても間違いでないでしょう。

同志社ハリス理化学校は1891（明治24）年4月に開校式が行われましたが、これに先立つこと前年の9月に授業を開始しています。ハリス理化学校は同志社英学校を大学レベルの学校に引き上げるためのさきがけになる部門で、その当時このような理系の学部をもっている大学は東京帝国大学しかありませんでした。新島の理系学問に対する見識の高さを示すものであります。しかし、新島はすでに8カ月前、神奈川県大磯の百足屋で天国へと旅立ち、ハリス理化学校の開始・開校を見ることはありませんでした。

生前、新島は「同志社ハリス理化学校」の開校に向けてJ・N・ハリスと書簡のやり取りをしていて、ハリスからの書簡が7通残っています。今日はそれを紹介したいと思います。

ハリスの寄附の趣意書

このJ・N・ハリスは米国コネティカット州ニューロンドンの事業家で、1889（明治22）年12月に寄附の趣意書の書簡を「同志社ハリス理化学校」宛に送ってきています。これは寄附に対する公式の文書で、その内容の概略を示しますと三つの項目について述べてあります。

第一は寄附の目的

- キリスト教（主義）の拡張、キリスト教の感化の下で理科教育の機会のために、同志社につながる理化学校に10万ドルの寄附をする。
- 同志社普通学校の課程を充実させるためキリスト教主義総合大学（Univ. 総合大学）の一部を組織〔構成〕するハリス理化学校である。
- 同志社普通学校の卒業後の、高度な理科教育課程である。他校からでも同等の資格のあるものは入学できる。

第二は寄附金の使用用途

- 学校の地所、建物、機械設備に2万5千ドル、主たる建物はハリス理化学館であるが、この中には寄宿舎のための2千ドルを含んでいる。
- 5万ドルは維持資本として日本政府の公債にする。この資本より入る収入は年々理化学校の必要な経費に充てる。余剰は普通学校の理科教育の費用に使っても構わない。
- 2万5千ドルは米国で投資しアメリカン・ボードの監督下に置く、内2万ドルはニューロンドンに建築される建物に充て、同志社の理科教育のために使用する「ハリス理化学校資本」と命名。残りの5千ドルは「ハリス同志社図書資本」と命名、理化学校及び普通学校において理科教育に必要な書籍及び器械を購入するために使用する。

第三は運営の形態

⑦ 日本の法律が可能になれば、アメリカン・ボードの宣教師に同志社社員と全く同等の権限を与え、日本人3名と宣教師3名の合計6名よりなる特別委員会を編成し、約20年間は直接管理運営に当たる。議長は社長、副議長は宣教師で私としてはデヴィスが望ましい。この委員会はキリスト教とハリス理化学校の目的を達成するために、教授や教員の人事や俸給、学科の教科課程の編成などに当たる。

以上三つです。それではこのような10万ドルという多額の寄附を申し出たハリスとはどのような人物であったのでしょうか。

事業家としてのハリス

1815年11月18日コネティカット州セイラム（ニューロンドンの北西およそ16km）の農民の家に（13人兄弟の）長男として生まれました。農場の暮らしぶりは比較的楽であったようですが、ハリスは17歳の時ハンブルグの町で雑貨店の店員を務め、21歳の時にニューロンドンに出てSmith & Cadyという雑貨店の店員となり2年間務めました。この店の主人Ance C. Cady氏がハリスに仕事を与え、事業を指導したのが、後年ハリスの事業の成功のきっかけになったということです。

23歳（1838年）には100ドルの資本金で雑貨商として独立しました。一時は夫人の兄G. W. Brownと共同経営もしましたが、一般百貨店事業の他にも、農機具や鉄鋼、金物類も扱い広く経営するようになりました。事業は発展し続け、J. N. Harris & Co.という製薬会社をオハイオ州（シンシナティ市）に設け、カナダ（モントリオール市）にもFellows Medical Manufacturing Co.という製薬会社をつくり、この2社から売り出した専売特許のVegetable painkiller（鎮痛剤か）という塗り薬が随分当たったようです。

50歳（1865年）にはNew London City National Bank頭取になり以後20年以上も務めました。合わせて、New London & Northern Railroad社長、New London Steamboat Co. 役員、New Londonガス会社社長等も兼ねるようになり、ニューイングランドにおける一流の実業家として成功しました。

ハリスの社会的活動

一方、政治家としては40歳（1855年）でコネティカット州の議員に、翌1856年にはニューロンドン市長となり47歳（1862年）まで2期務めました（なかなか評判の良い市長だったようです）。49歳（1864年）の折にはニューロンドン選出の上院議員にも選ばれています。

キリスト教信仰はニューイングランドのピューリタンの流れをくむ熱心な会衆派のクリスチャンであり慈善事業、海外伝道には関心をもっていたようです。

福音伝道者のDwight L. Moodyの熱心な支持者でMount Hermon SchoolとNorthfield Seminary何れも牧師養成の学校ですが、その設立に協力して、後年78歳（1893年）には前者の校長に就任もしています。ニューロンドンにハリス病院を造り市に寄附して市民に広く開放しました。ニューロンドン市のYMC Aの設立にも多大の尽力がありました。

所属していた教会、ニューロンドンのSecond Congregational Church（第二会衆派教会）で役員も務め、事業で得た資金で会堂の維持、パイプオルガンをはじめカーベットの寄附、夫人による牧師館の寄附など教会運営の柱石になっていました。D・W・ラーネッド（アメリカン・ボードから同志社に派遣された宣教師で、同志社の草創期に大きな働きがあった、京田辺校地の図書館に名前が残っている）もこの教会の会員で、同志社への寄附との重要な関係があったと思われます。

また海外伝道に関心をもっていてアメリカン・ボードの理事を務めており、A・ハーディーも同じ理事で面識があり、ハーディーを通じて新島の事は聞いています。A・ハーディーは新島を上海からボストンまで運んだワイルド・ローヴァー号の船主で新島のボストン上陸後、生涯援助し続け、新島の「米国の父」と呼ばれています。

このようにハリスは成功した事業家で、また政治家としての経歴もあり見るべきものは多いが、最も尊敬を受けたのは宗教及び慈善事業における経歴です。事業で得た財産をキリスト教の発展や社会への慈善事業に還元していたのです。その中の一つに「同志社ハリス理化学校」も含まれているわけです。

事業の面、社会貢献では輝かしい足跡を残しているハリスでしたが、家族の面では恵まれませんでした。28歳（1843年）でJane M. Brownと結婚し8人の子ども（4男4女）を得ましたが、その内5人は0歳から4歳までに、後の3人も30歳までに亡くしています。ハリスは自分の生きている間に子どもをすべて見送ったことになります。

寄附に貢献したラーネッドとグリーン

次にハリス理化学校のはじまりは「一八八八（明治二）年春、新島の希望を知っていたラーネッド教授がこれをコネティカット州在住の母堂に伝えたところ、母堂からニュー・ロンドンのハリス氏に談合してはという注意があった。・・・交渉が始められたところ、同年秋、同志社へ一万ドルの寄附申込みがあり、さらに五千ドルが追加されたが、翌年の秋にはハリスは総額一〇万ドルの寄附を決意するにいたった」とあります（上野直蔵『同志社百年史』通史編一 同志社 1979年 372頁。以下通史編①372）。

一方、D・W・ラーネッドの『回想録』（同志社 1983年 14頁）には「同二十四年に私の母の友人からの寄附金によって理化学館が建築され」とあり、寄附金はラーネッドが切っ掛けになっていることは間違いありません。さらに、恩賜休暇でアメリカに帰国中のD・C・グリーンがハリスと交渉し、新島の思いや同志社の希望を伝えました（このグリーンはアメリカン・ボードが日本に最初に派遣した宣教師で、同志社で教師として英語、神学を教え、彰栄館、同志社礼拝堂、有終館〔書籍館〕を設計もしています）。

またグリーンはハリス側の状況も新島に伝え、新島が計画をデヴィスやラーネッドと相談すれば、ハリスに伝えることができるということを示唆しています（1889年2月11日付新島宛書簡）。こうしてグリーンは米国のハリスと日本側の新島や宣教師ラーネッド、デヴィスの仲立ちとして寄附金の話を進め、増額の交渉の話ではイエール大学のシェフィールド・サイエンス・スクールと同じように同志社のハリス・サイエンス・スクールと名前をつけて呼ばれることが条件となりました。

その結果1889年4月27日付のグリーンからの書簡で、メモではあるがハリスが寄附金を10万ドルに増額することを決意したと新島に伝えてきました。そしてラーネッドの勧めで新島は5月17日にハリスに私信の礼状を送りました。それに対してハリスが送って来た書簡は、寄附に至ったハリスの生の気持ちが表示されています。

ハリスからの最初の書簡

1889年7月8日 Trustees of Doshisha College宛

以下の書簡は『新島襄宛英文書簡集（未定稿）』（3）同志社大学人文科学研究所（2007年3月）に拠った〔英文書簡和訳は講演者。文中の【 】は書簡番号を示す〕。内容も鑑みて、ハリスが同志社や新島に最初に送ってきたものと思われます。10万ドルの寄附は決意しているし、ハリスの名前のつく学校で計画されていることも決まっています。このことをハリスは知っている段階です。

「同志社につながる理化学校の設立及び維持のためにお金を寄附するに至った理由を述べます。

米国と日本の最初の条約の時1854～1858年から日本のこと、またこの国の人々について知っています。政府の調査団が米国政府に関する重要な事項や教育のシステムについて調べにやってきたことを覚えています。

（1854年3月＝日米和親条約、1858年6月＝日米修好通商条約）

また、日本の若者が教育を受けるために来ているが、私の知っている限りでは気質・能力も好評で、彼らの多くはまじめなクリスチャンになっているし、彼らは自国民に誇りをもっている。

私は新島氏のことについても知っている。彼のボストンへの上陸の時から現在までのロマンティックな経歴、日本での大きな使命が成功したことに深く関心をもっている。キリスト教に基づく教育のシステムを設立し、維持し人々を導きました。それが国民を偉大で豊かなものにし、人々を高尚にするでしょう。

聖書には、我々は神の同労者であると記され、私は心と知性でこれ信じます。神が日本での神の王国の設立を望んでいることも信じます。このために人々に対し私のすべき大きな仕事があります。私の助けが必要とされる理由です。そうすることが私の大きな喜びでもあり、正しく高尚な国民にすると信じています。

今まで日本に対して与えることを頼まれたり示唆されたことは無い。何度も神に私が世界に対してするべき義務を示すように願った。現在、福音の真（まこと）を育てるための豊かな土地として、日本に注目するように「神」から指示された。人々には、直ちに福音の真が必要であると思えます。

新島校長宛 P S

この学校はキリスト教教育の道筋に保たれていると考えています。この件に関して私の手紙をラーネッド教授に見せて、最善のことをあなたの考えで示唆してほしい【406】。

徳川幕府の鎖国の状態はくずれ、頻繁に日米の関係が生じ出した頃からハリスは日本の事に関心をもっていたことがわかります。新島が田中不二麿の通訳として働いた欧米使節団の事も、日本からの留学生を見る機会も多かったのでしょう。海外伝道に関心をもっていたので、まじめな姿勢に感じ、援助、寄附することに意味があるとの使命感に達したのでしょう。そのまじめな日本の学生の筆頭には新島襄がいたことは間違いのないでしょう。アメリカで真摯に信仰と勉強に身をささげた新島が帰国後、日本で学校を開いたことをハリスは知っていました。

後半ではハリスのキリスト教に対するまじめな信仰が表れており、キリスト教の拡張、神の国の繁栄のためにこれらを援助することは必要であり、そうすることが自分の義務であり、自分自身の大きな喜びとなると示しています。

同じ封筒の中に

1889年7月8日 新島宛（この頃日米間郵便はおおよそ1カ月かかっている）

「5月17日付のあなたの書簡を受け取りました。すぐに返事をしようとしたが、他の仕事が忙しかった。あなたの健康が回復していることをうれしく思います。健康を取り戻すことを願っております。

理事会に手渡す書簡を同封しました。あなたが計画している総合大学に関連した理化学校設立についての私の計画への思いの理由を述べています。

この学校に対するキリスト教教育に関してはラーネッド教授にこの手紙を見せてください。

P S あなたの写真をありがとう。近々私の写真を送ります【407】。

ラーネッドに勧められた新島の手紙がすでにハリスに届いていることがわかります。新島の体調がすぐれないことも伝わっています。写真を送ることは信頼の意味もあるのでしょう。ハリスはラーネッドに自分の同志社への寄附に対する理解と運用を頼みとしていることがわかります。

その後の3通の書簡

1889年7月25日 新島宛

「1879年に写した写真を同封いたします。今年写したものが他にありますが、私の友人は送った写真の方がむしろ良いと言います。下村が後の方の写真を持っています。明日ラーネッドに郵便で理化学館勘定の3千ドルを送ります【411】。

手紙を出した時のハリスの年齢は74歳で、送った写真が64歳と10歳も若い時のものを送ってきたのは面白いですが、手紙の時点では子どもはすべて亡くしていて、一方、10年前というのは自慢の娘二人がまだ存命の時に写したもので、将来に対する気力が充実していたのでしょう。現在のものを下村孝太郎に渡したのは、下村を信頼していたことを示しているのでしょう。ここで下村孝太郎が出てきているのは、米国でハリス理化学校の準備・計画についてハリスとウースター工科大学のフラー学長、宣教師グリーン、そして留学生下村を含めて相談した関係があります。

1889年9月6日 新島宛

「7月17日付の手紙をありがとう。同志社大学と関連したハリス理化学校を設立するための私の寄附10万ドルを同志社大学の理事会が感謝すると連絡をありがとう。

私はこのことを喜びと感謝をもって行います。神は私に喜び心を与え、あなたにこのお金を与えることを求められた。これは神の栄光とあなたの（国の）国民に大きく良いことと信じています。我々は神の同労者であり私の義務であることを疑いません。あなたの考えている総合大学が大きくなってほしいという私の望みがいかに大きいものか言いようがありません。手を使わずに山から切り出された石が全地球に満ちるように（ダニエル書2章34節）。

私はラーネッドに郵便で建物勘定の3千ドルを送ります。ウースターのフラー学長に購入してもらっている理化学館の装置の支払いをします。

同志社の教授団、理事よろしく伝えてください。7月の生徒の集合の写真をありがとう【419】。

7月17日の書簡は同志社社員会（理事会）として正式に寄附を受理すると送った礼状【1889年6月7日社員会記録（上野直蔵『同志社百年史』資料編二 同志社 1979年 1266頁。以下資料編②1266頁）】の返事と思われます。

この時点でハリスは自分の名前のついた学部（ハリス理化学校）ができることに、また神が導いたことに感謝し、自分の働きが日本にとって良いことであり、神の栄光になることを信じてと言っています。現地米国では、新しい学校のための器具の取り揃えなど、ウースターのフラー学長にも協力を得て、下村を含めて準備に入っている時期です。

1889年11月25日 新島宛

「10月18日付のあなたからの手紙受け取りました。同志社とそれに関連した理化学校の興味あることをあなたから聞かせてもらうことはうれしいことです。

ハリス理化学校の化学の教授に下村氏を任命することは賛成です。支払うべきサラリーは理事会で調整し、同志社に關係するアメリカ人教授と協議してもらえればうれしいこと

です。私はラーネッド教授に下村氏のサラリーを支払う準備をするように手紙に書きました。あなたがその学部を準備するために下村氏に仕事を依頼しているからです。理系の学部は同志社の大きな信用になるでしょう。

下村氏について私が知っている限り、彼は理解力があり、まじめなクリスチャンで教授にはびったりで好ましいと思っています。私は下村氏の手紙に非常に関心をもっています。その中には理事会としての報告や、実際の学校との関係等を知らせてくれるからです。私は将来のことに非常に関心をもっていますので、アメリカン・ボードの主事クラーク博士に手紙を書きました。私はあなたの理事会のメンバーが品位が高く永続的に基金を委託しても管理してもらえることを知って喜んでます。

建築の基本計画は学長室、応接室その他であるが、最近の手紙では計画は変更されていますね。私の考えでは、建物はすべて理化学部が必要とする限り優先して使用されるべきです。それまでは同志社のために使用してもかまいません。クラーク博士との相談は、むしろハリス理化学校の計画と寄附金の基金の投資の事です。21日に私はラーネッド教授に3千ドルの為替手紙を送りました。

あなたの健康の回復と、日本でのあなたの仕事の大成功を心から願って、お祈りします」【439】。

新島の手紙による報告からハリス理化学校が実現していくことに喜びを感じ、米国では理化学校の準備・計画についてグリーンやフラー、下村孝太郎らと話し合い、進められていることが分かります。この準備段階で下村との接触を通して、ハリスの下村に対する評価は高くなり、信頼を置いていることが読み取れ、理化学校の教授に任命することに賛意を示しています。日本側ではハリスは相談や送金などの窓口としてラーネッドを頼りにしています。

読まれなかった最後の書簡

1889年12月26日 新島宛

この書簡は新島存命中の最後の書簡で、ハリスは新島に親しく話しかけるように書いているが、新島は読むことはできなかったに違いありません（翌年の1月23日に大磯の百足屋で亡くなっている）。

「11月22日の東京からの手紙を受け取りました。ラーネッド博士からも京都で理化学館の定礎式が行われ上部構造が建ったことを知らされてうれしく思います。私は未だ建物のプランは知りませんが、近々ラーネッド博士がスケッチを送ってくれます。建物の完成があなたの目的に良い答を出すことを心から願っています。建物が建ってあなたのキリスト教教育に関連して使用されることは、私にとって大きな喜びです。私はあなたの国民に大きく良いことが芽生えることを深く信じております。神がアブラハムをカルデアから呼び出した（ヘブライ人への手紙11章8節）のと同じように、神があなたをこの国に呼び、あなたに特別の仕事を準備したと信じております。

神は私に日本に与えるお金を備えさせ、日本国民の繁栄に深い関心をもたせ、価値のある方法で助成することを要求されたと信じています。神は方法を提案し、それを実行するように私の心を動かされた。我々はそれがキリストのためであることを知る時、与えることは簡単で、喜びです。

郵便で受け取った美しい写真、そしてゲインズに託された珍しい菊にお礼を申します。間もなく確かなことになるでしょう。

私の庭師はあなたがハーディ夫人に送った菊という植物について知っています。その栽培についても理解しています。彼は我々のコレクションの中にこのような植物のあることを誇りに思うでしょう。

私はハーディ夫人と面識がないのは残念ですが、ハーディ氏とは面識があり、何度かあなたについて話しています。我々はどちらもアメリカン・ボードのメンバーだったからです。あなたがフィリップス・アカデミーに在学している時、私の娘がアボット・アカデミーにいました。彼女はあなたの顔は見知っていました」【444】。

理化学館（現在のハリス理化学館1889年竣工、重要文化財）の定礎式が行われた報告を受け、学校の開校が現実味を帯びてきて、まじめなキリスト教徒としてこのような事業への神の導きに聖書の言葉を引用しながら、感謝しています。

一方、新島は同志社の発展のため、多額の寄附を申し出たハリスに対し、心からのお礼として、同志社（日本）から米国に帰国するゲインズに託して菊の花を送ることを約束しています。ハリスのその返信です。新島は確かに「氷上の霜」という白菊を購入してゲインズに預けており（⑤397）、届いていることは間違いありません。

また、ハリスは愛する娘（Mary Woodruff Harris）から新島がフィリップス・アカデミーに在学中（新島襄が米国に入った年から2年目、22～24歳）であることを聞いており、ハリスが新島の渡米後のごく初期から知っていたことになります。その当時、ハリスにとって新島は、海のものとも、山のものとも分からない外国の若者でありましたが、今では立派にキリスト教の信仰をもち、祖国日本に学校を設立して成功しています。その経過を見て、寄附が学校の更なる発展と日本の国民のためになると強く信じ新島に託したのでしょう。しかし、この手紙を新島が読むことはなかったのです。新島の大磯での逝去直後の頃に京都に届いていたでしょう。

ラーネッドに対する思い

ハリスは「神の意志、そして指示によって寄附を決意しました。それは私の喜びです」と、再三書簡に書いています。ラーネッドの紹介、申し出で寄附を決めたとはどの手紙にも書いてはいませんが、「ラーネッドに手紙を見せてほしい」と書いたり、送金はラーネッドを通して日本側に送るなど、ラーネッドと関係が密接であることを示しています。それだけラーネッドを信頼していたし、日本側で寄附が適正に、また、永続して使用されることを願っていたのでしょう。また、ハリスが新島のことを信頼していたことは間違いなが、現場での実務については下村に絶大な信頼を置いていたし、下村を非常に高く評価していたことも間違いありません。

その後のハリス理化学校

1890（明治23）年1月23日、新島の逝去のあと、ハリス理化学校はその年の9月に授業を開始し、翌1891（明治24）年4月7日に開校式を行いました。1892（明治25）年に薬学科新設、1893（明治26）年には理化学校第一回卒業生4名を出しました。また同年には検査部を設け、一般からの化学分析等科学的な検査に応じました。ハリス理化学校は順調に発展していくと思われましたが、1894（明治27）年当時日清戦争以後、国家主義が台頭し、外国人やキリスト教に対して敵意が高まってきました。その結果、学生に対する徴兵制度の猶予・免除の問題や、1890（明治23）年に発布された教育勅語が「本財団ノ維持スル学校ハ基督教ヲ以テ德育ノ基本トス」（資料編②1161頁）とうたう同志社に大きく押し掛け、同志社の発展はおろか存続すら危ぶまれるような社会状況になっていきました。1886（明治19）年度の学校報告では「徴兵に対する恐怖のために、毎年われわれは最良の生徒多数を失っており、同志社は徴兵免除を受けている官立学校のための予備校になる傾向がある」（ポール・F・ポラー『アメリカンボードと同志社1875ー1900』北垣宗治訳新教出版社 2007年 113頁）と報告しています。同志社を日本の教育制度に適應させる方針を追求して、1895（明治28）年小崎弘道は同志社の名前のついているものはすべて同志社の管理下にあると見なして権限を集中化しようとした。ハリス理化学校の資金も同じでした。この方針で、ハリス理化学校を指導するべく選ばれた下村孝太郎と衝突しました。下村はハリス理化学校は同志社との関連で運営されるが、同志社からは完全に独立したものであるという保証を与えられていました。下村はJ・N・ハリスの寄附の手紙（趣意書）を小崎に再度見直すことを要求しましたが応じられず下村は辞表を出しました。

このあと1896（明治29）年8月には薬学科が廃校になり、翌1897（明治30）年「理科学校の学課程度を引き下げて、同志社高等学部の一部となし、以て科学的専門教育を授けることを中止し」（「ハリス理化学校関係資料」『同志社談叢』5 1985年 121頁）ハリス理化学校は廃校となりました。それまでのハリス理化学校の卒業生は22名に終わりました。

日本が明治維新を迎え欧化主義がうたわれていましたが、時の経過とともに国家主義の台頭で徴兵制度の問題や教育勅語の発布と重なり、キリスト教主義をうたっていた同志社には厳しい環境になり、その対応でこのような結果に行きついたことは返す返す残念なことでした。

理科専門教育の再興

理科専門教育の再興については1908（明治41）年に「ハリス理科学校再興二付経営予算案」（資料編①479頁）という文書が残っていますが実現しませんでした。

その後の流れとしては太平洋戦争の末期まで待たねばなりませんでした。敗戦前の1944（昭和19）年4月同志社工業専門学校開校で理科専門教育が復活し、新制大学として1949（昭和24）年4月同志社大学工学部設置で大学へと昇格しました。最近では2008（平成20）年4月同志社大学理工学部に名称変更されています。

この間、アメリカで投資されたファンド（資金）の果実は、一時同志社とアメリカン・ボードとの対立で、1896（明治29）年から凍結されましたが、和解が成立した1899（明治32）年に復活し、以後今日まで毎年、アメリカから同志社に送られてきています。日米が太平洋戦争をしていた時もです（末光力作『若草蒔いてー同志社生活の中からー』1993年102頁）。新島の真摯な生き方に感じ、キリスト教と理科教育に対して多額の寄附を決意したJ・N・ハリスの精神、科学教育への思いは120年を越えて今でもなお脈々と同志社に送られてきているわけで、感謝すべきことです。

そして1992（平成4）年4月にはハリス理化学校基金規定が施行され、米国から送られて来ている果実が特化され、理工学教育研究の奨励と国際交流の強化につかわれることとなっています。